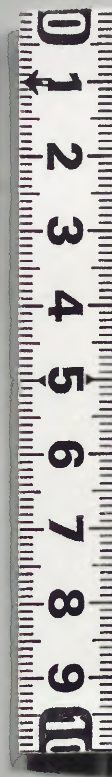


日本書紀傳 十五卷

和書
一〇五二二號

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156 (45)	
函號	特	85 1



知其神暴惡至來詣之狀乃勃
然而驚曰吾弟之來豈以善意
乎謂當有奪國之志歟夫父母
既任諸子有其境如何棄置當
就之國而敢窺窬此處乎乃結

髮為髻縛裳為袴便以八坂瓊
之五百箇御統御統此云纏其
髻髮及腕又背負千箭之鞞千箭
此云知與五百箭之鞞臂著稜
能梨ノ梨與トモ五百箭之鞞臂著稜
威之高鞞稜威此振起弓彌急

握劍柄踏堅庭而陷股若沫雪

以就散テ クエ ハラカシロ 就散此云 穢エ アルハシ 奮稜威イ ツ

之雄詰ノ ヲ 雄詰此云 發稜威之噴イ ツ ノ コ

讓ビテ 噴讓此云 而徑詰問焉テロ タニ ナジリトヒタマヒキ

攀廬此云 於天也と書捨て此以後少在つる伊井諾尊の御事を

外小記す可き所無きが故に此間少云終めて又端を
改起して上より承統く所多きが故に其以前少立後
りて始てハ云らふて前段小是後と有小對ハ乃ら所
あり口訣ハ始者諾尊上天以前也と云らふ如し此
文法多く有る事少て宝劍出現章第四一書小素戔嗚
尊帥其子五十猛神降到於新羅國と有て其より緯小
他事を云終めて初五十猛神云々と徑小承統らると同
ト格ふる所あり 然ルハ俗小以前も以後とも最
の起りを初而ふと云と 最初とも云程の事少て今事
ハ同トウラう者なり ○昇天之時ハ上小乃昇詣之
於天也と有ハ其時の御事を申せらるる第二一書小

俗地神本紀云此
 牙一書之文と此
 加へて素等鳴尊將
 昇天時有一神流羽
 明玉此神亦迎而進以
 瑞八坂瓊之曲玉矣素
 我鳴尊持其瓊玉
 而昇天之時瓊以
 之鼓盪山岳海島之
 鳴响と有ハ云々華
 まで此文下の撫て小
 鹿と所多ハ其意
 して読べし

小此事を將昇天時云々宝鏡開始章第三一書少扇天
 扇國上詩于天時云々之所見なり是亦同ト○溟渤ハ
 和名抄小和名於保岐宇三見日本紀也と有り古訓不
 リ名義抄小然訓り万葉二十五十少於保吉宇美能
 美余曾已布可久と詠る云と考る小唯ハ大海と云よ
 リハ次めて甚だしく太小き意ありと所見なり万葉
 六十七少稻見野能大海乃原笑七五子大海尔嶋毛不
 在尔海原絶塔浪尔又十七大海尔荒莫吹又十八大海
 之水底豊三立浪之又二十大海之浪者畏又二十大海
 之磯本田須理立浪之又三十大海候水門事有後十六

通説博物志東海
 杯渤海之選詩六牙
 此類爲溟渤と有り

丁小大海方往浪之千重積十一三十大海二立良武
 浪者又四十大海之荒磯之渚島十二二十大海之底
 半深目而十七十八大海乃於久可母之良受ふと有り
 此中小ハ其詠主の心ハ大を於保伎と訓す可く書
 たるも有べけれど今此を辨へ難しと云も其趣小
 隨ひて訓ずバ有べし又名義抄ハ渤海○以之爲之
 小於保奈美宇都と云訓も有り心得べし
 を此任子訓てハ漢風あり以之を許能由惠尔と訓ハ
 く爲之を曾礼哉多未尔と訓て是と其とを對ハ令む可
 一釋秘訓コ或説以之爲之一向不説云云先師説云引
 合如此讀之可爲是云云と有て古人ハ漢めう一きハ決り
 ざりけり意味見えたり但引合せて以之爲之ハ訓
 を捨り時ハ其語の調悪し

今身二一書ヲ吾也
東者之又

く有て古語の状ハ非まハ一向ニ由惠ハ後末の義小
除きて読ぶるを疑ハ云難ク由惠ハ後末の義小
て其後來る事の行末を此ト云事ヲて典斯の寄
其の義多ク小對ヘリ雄略天皇十三年御紀ハ耶麻能
謎能故思磨古喻衛ルと有り万葉十四丁十四由惠波
奈家持母兒良尔與里氏曾々有レ後レひて其假字を
知ベレ古事記ハ我耶勢命之上來由者必不善心と有
を室鏡閑始章第三一書ハ吾身所以ニ上來復好意ニ書ル
たレが如く漢籍の所以を由惠年と訓ニ又以字をも
由惠と云事常ホレ奇ク考合せて曉
可レ然ルハ今以之を許能由惠ホと訓を定メたる
事古人ト對ひても大ケも後レたレトハ思ハ

今不て此トハ大海ノ音
浪ノ立聲ト云

さレり所レハ○鼓盪ハ登持呂尔多陀用比ニ訓リ偕登典
年ハ物の動キ響ク事アルレ登持呂久ハ其動キ響ク
音の有を云て此の登持呂是レあり古事記ニ於テ天之石
屋戸伏汗氣而踏登持呂許志と有り又天沼琴拂樹而
地鳴動と有レ動鳴を記傳ニ登持呂伎ト訓ルたるハ
實ニ當レルニ正訓アリ神功皇后御紀ニ掘溝及テ迹ト驚ト
岡大磐塞之不得穿灌云ニ當時雷電霹靂裂其磐令
通水と有レ地名も古今集ニ天原踏車ト鳴神も思
ふ中をハ裂ル物ト有レ如く雷の事ト因ル也
地名あり天武天皇八年御紀ニ幸泊瀬以宴迹驚淵上

△此言の事傳十九
丁云云

之有也其等小因以地名と聞えたり出雲風土記加
賀神埼條小今人此窟邊行時必聲磗磗トコロケテ而行若密行者
と密ヒツミ對云り万葉四三丁伊勢海之磯毛動トコ尔因流
浪六二十丁小佐保乃内尔遊事平宮動トコロ尔又四十丁秋去
者山裳動響トコロ尔左男鹿者妻呼令響又四十丁白鶴乃妻呼
音者宮毛動響二十一四十丁三名之幾許瀧毛動響二
十八二十丁須受可氣奴波由麻久太礼利佐乃毛等騰
呂尔と有ふとは是あり十四二十丁於久夜麻能真木乃
伊多度半等持登之氏と有る等持も右子同ト今も戸
を登呂トコロ叩く響トコロ又響トコロ又威すふと云語も此と同致
て考る小驚く又響トコロ又威すふと云語も此と同致

合衆行天皇千金御
紀事本因起王
船漂湯

の言ふ者あり借鼓字ハ本より都豆美と云字あり
が名義枚少字都と多加久とも多都とも訓
字あり上小云る溟渤の渤小於保奈美字都と云訓有
を考合せて其趣を知心き者なり鼓盪字ハ易繫辭小
剛柔相摩八卦相盪鼓之以盪を多陀用布と云ハ神世
雷震と有る取れたり
七代章小洲壤浮漂其弟二一書子猶浮膏而漂蕩古事
記も久羅下那洲多陀用幣流と有り其言義傳三
五十丁云り万葉十八丁小秋風吹漂蕩白雲者大同類
聚方ハ有加倍流知須地登波有喜二能有美仁多堂
典遍留我如志と有り名義枚小字流布と小曾久と
も於碁久と也登良加須と也字加須と也訓九其於
碁久ハ動くと云ふる可一然ハ溟渤以之鼓盪と云

△神功皇后五十一年御
 征の御出立の所、船師
 滿海、旌旗、雜、日、鼓、吹
 起、声、山、川、悉、振、り、事
 あり有る也
 △神功皇后五十一年御
 記、今、臣、在、下、回、如、山
 岳、と、も、有、て

ハ暴風を起し奔潮を立て溟渤を涌返る計は蕩々
 給へるを云ふり宝劔出現章第三一書小扇天扇國
 見え古事記山川悉動國土皆震と有を合せ考へて
 其状を尙知べき事あり口訣ハ盪揺也溟渤鼓盪
 又蕩ハ同一通證ハ相如上林賦曰者四海鳴動也云り盪
 山陵為之震動川谷為之蕩波と有 ○山岳公字の如く
 小てハ山と岳との事なりあり右ハ溟渤を云て其ハ
 並べたるハ國土の皆を云事ふれども其主と鳴响る
 ハ山岳ありが故ハ國土と云ずして山岳とハ云れど
 も意ハ古事記ハ國土皆震と有之同ト所ふる者あり
 此即後ハ謂ゆる地震ふじの状とて山鳴り地動けり

を云ふり 同記神迹 亦も青山如枯山泣枯河海者悉
 泣乾と有が如く御稜威の一速く健き大神ハ御在り坐
 せハ天ハ參上給へるも斯る甚しき御事の御在り
 坐りあり有好可き但其ハ御心の汚く御在り坐り
 の却疑有し時ハ誓給りて御自けり非ず高天原て日神
 申出給へるも其明き御心の頭化なり但此ハ神性
 の雄健く御在り坐り為り然るも其ハ異なりけ
 る事ありども人世と成てハ神等の御心の一速き時
 小ハ有る事あり天武天皇白鳳十三年御紀ハ冬十月
 云々大地震舉國男女叫唱不知東西則山崩河涌諸國
 郡官舎及百姓倉屋等寺塔神社等破壊之數不可勝數

云々是夕有鳴聲如鼓聞于東方有人曰伊豆國西北二
面自然增益三百餘丈更作一鳴云々有如此一鳴
を作らせ給はむとての御事と所通たるは大地を震
動らし給ひて其子遇る諸國の人畜の死傷ふどの如
きハ顧させ給はむとて如き事有り又聖武天皇天平十
四年御紀云十一月壬子大隅國司言云々空中有聲
野雉相驚地大震動丙寅遣使於大隅國檢聞並請聞神
命と有て斯る地震ふどの有る時ハ神命を請聞し
の給へるハ其一速び坐す神の御心を問奉りて其御
心の如く治奉らせ給はむとあり此を以て山岳鳴响

國土震動くみと神の御健びし依る事を知て其元の
元を原ねて和鎮め奉らずハ有べり但右の二
件ハ人世
小常も有る地震の事あるを此引て其趣を同ト状
小云ハ如何と思ふ人も有るありあはれども山岳鳴响
と云ハ國土皆震と云ハ同じけれハ異なる者トて
ハ何ふる状とも知る可き由無のちを如何みとて
為○為之ハ右の以之ヲ對へて曾礼我多米尔と訓べ
き事右七十云云如一多米ハ手聚タテりて向カり事
我ハ手前ハ引附て云語あり可一君ガ為と云ふ時ハ
我ガ為す事を君の方ハ附らあり我ガ為と云ふ時ハ
人の為す所を我ハ身ハ聚らあり是其義あり古語拾
遺ハ素戔鳴神奉為日神行甚状無と有る歟一例を以

て示さば素戔鳴尊の状アキキナ無き事を行給ふが日神の御
上小状無く成が故に奉為とハ云るあり是よ心得
べし此も然り神性の雄健く御在し坐すハ素戔鳴尊
て多采ハ手聚の神性あり其が来りて山岳が鳴响ハ至れり
よて克合へり○鳴响ハ國土の震動く音の怒るが如
く響き聞ゆるあり鳴ハ音有るありて動けハ自然に聲
有を云ひ响ハ心動ホユルめて獸ふど怒て聲を立るを云
ふ言あり古今集長歌云小吠けむ獸の云々五代帝
王物語小主上悪くして御顛倒の有けりと御犬の
立廻ニリ如法ホ小吠ホ參りてたり云々ふと有り知名枚
體主群ハ嗥虎狼聲也吼牛鳴也吠犬聲也訓皆保由と有

目と又傍子久知保
都布と

り然れハ假字ハ保由あり名義抄を見らむ响と吼と
婆布とも保由とも祭久ともハ同字あり伊昆伎とも
号鳴响响と有り然れハ此字を取て書れり者あり典
諸此鳴响ハ右引る天武天皇御紀ハ鳴聲如鼓と見
元聖武天皇御紀ハ空中有聲と有り又統紀ハ天平宝
字八年十二月西方有聲似雷非雷時當大隅薩摩兩國
之塚烟雲晦冥奔雷去来云々沙石自聚化成三嶋云々
又天平神護二年六月己丑大隅國神造新嶋震動不息
以故民多流亡と有るハ神の新嶋を作給ふ震動ヒトふ
れども其聲有るハ即鳴响と云ても同ト事ありあり
統後紀ハ永和四年三月戊申陸奥國言玉造塞温泉石

神雷響振晝夜不止云々燒谷塞石崩折更作新沼沸聲
如雷云々仍仰國司鎮謝災異之見元同十年四月己未
羽指列陵守等言去月十八日食時山陵鳴二度其聲如
雷即赤氣如飄風指離飛去申時亦鳴其氣如初指兌飛
と有ふとハ神の御怒ニ因れるふれども其鳴响る事
一多し右等の例を擧て思ふ鳴响ると云聲ハ一ハ
雷の鳴か如くして甚々凌兢スサマしりつる御事よてこ
ろハ有つりぬ然るハ鳴响の字ハ楚辭ニ依て書れぬ
係つりふ可ハ非ず其雷の如く一〇此則ハ右の山
海の鳴動けりし事の故由を此子云ハ云々あり〇

神性ハ加牟佐賀と訓り四神出生章第一一書小是性
好残害第一一書此神性惡常好災患と有る性字ハ
比登ニ那理と訓べき所ありて傳九七ハ註せりが如
く其ハ人の生立を云ふれば此の佐賀とハ等しうり
ず傳六八十九十三ハ祖云るが今此ハ云ハハ先皇
祖天神の御命を持て顯身と生出來る其物實ハ一ハ
傳十二百八十五丁ハ註せりが如く天津御靈を以て
人身と結ばる事ハ有れば廣く我身の上ハ取て魂
と云物よて精神クワシヒ是あり但多麻ハ皇祖天神より賜ハ
れば自然子人の性情を云ふ名の如く若て其靈ハ彼方
くも成たるハ其廣き子後ふあり

より来れり者あり我身中凝固りて我心とあり事
譬へば父母ハ我身を成せり者あり有れども此身ハ
己が身にて父母の身あり母と同一理あり然れば心
ハ許て云々本にて皇祖天神より来れり者の謂あり
田心姫命又ハ彦屋主田心命と心を許理と訓て古
事記高津小岐毛年加布許と袁陀迺迦と此ハ心を
許と詠し凝海菜を心太と云々許と詠ハ許流
と同一く其許流ハ物の来りて固る意あり者あり
唯ハ許と云ハ八意思兼神と天兒屋命とハ一神あり
又中心を那加基と云々思合す可一其委しき事
ハ下あり田心姫命と宝鏡開始章あり天兒屋命の傳

ハ云性とハ其心の有の任ハ生れたる所と云て真心
の義あり此ハ皇祖天神の御靈ハ依て善ハ生れ
着く物あり各其氣質ハ異あり所有て万人と雖も
人の面の如く同一くあり者あり各ニ其一人限不
相易ら不故ハ甚狭き物ありけれハ狭心あり可く思
えたり此事猶下述ハ譬へば花を愛て月を憐ふ
所大凡一あり者あり然りと雖も其愛る上ハ種々の
不同有り憐ふ上ハ品々の次第有て終ハ一向ハ成
る事能ハ然れば其性と云者ハ人の真心ありて実
不神隨ふ者あり宝鏡開始章第三一書ハ雖然日神
不愠恒以平恕相容焉と見えたり恒以平恕と云ハ即

日神の神性ニ御在一坐す事其ハ恒ニ有を以明レるの
奉る可一然ルハ同ト同母兄弟ミハラカラもて同ト時ニ成出ス
セ御在一坐す神等ノ御上シてモ天照太神ハ平怒トヤカふ
る神性ニ渡レセ給ヒ素戔嗚尊ノも雄健ケンカあり神性
あり御在一坐スるあり自然ノ御事ヲもてサも偽り飭
るせ給フ所無キ者是アリ然レとも右ノ二神ノ御本
性を此ニ善ト云ヒ悪ト云ハ違フ可一此ニ溟勅ニ鼓
盪ヨリ山岳鳴向スるあり有ヲ見奉ルハ神性雄健ニ有
る暴ク悪キ事ノ如ク月伺ハるれども下ニ吾所生
是女者則レ可レ以レ為レ有レ汚心若是男者則レ可レ以レ為レ有レ清心ニ口

固メさせ給へるハ的ハカ當ラて男御子を得させ給ひて
其清明キ御心を明クるの申すニ至ルせ給へり是を以
て神性ノ雄健アリるも性ノ悪ムハ非ズ事ヲを曉ク可シ
古事記ニ此後ノ事ヲを因テ此言者自我勝云而於勝佐備
云コと有ルと皆神性雄健ト云フ所アリ者アリ然ハ有
れども御母神ノ御許ニ根國ニ就坐シとハ所思ハ作
り天照太神ニ請ヒむ事ヲを御父大神ニ申シて其勅許
を賜リて奉給へるあり其御崇敬ノ御有状見えル
北ハ其雄健アリ御行ノ中ニ清ク善キ御本性ハ
著明ケれば此を善ト云ハ叶フ可ク也ト古人も言す

へたり事ハ有れども性ハ実ニ水ノ如ク雄健ハ河
ノ如ク平怒ハ沢ノ如ク流レテ止ラザルヲ水行キノ激
シキ故ニ觸ル者ハ必流レテ止ラザルヲ水行キノ激
ズ其流来リテを容テ餘サズ是ナリ又情ハ風ノ如
ク思ハ浪ノ如クふる可シ情ハ欲アリ思ハ情ニ牽
ルテ頭ハ所ノ者ナリ然レバ性ノ雄健も平怒も
欲ニ異ナルバ悪ト云フ此大神ノ神性ノ雄健ク
御在リ坐す御事ハ猶古事記ノ大穴牟遲命ノ參到坐
一所ニ即喚入而令寢其蛇室云々亦来日夜者入吳公
與蜂室云々亦鳴鏑射入大野之中令採其矢故入其野
即以火燒廻其野云々其父大神者思已死訖出立其野
尔持其矢以奉之時率入冢而喚入八田間大室而令取
其頭之虱云々其大神以為破吳公唾出而於心思愛

而寢之有が如きも其御子の到坐し時の事ありけれ
ば如何あり愛ありく物為させ給ふ可きも却りて甚
く寢の徴し給ひ其折折させ給はざるを見行して御
心ハ愛しし思ふし落着て御寢坐るあり然レバ實ハ
愛しし思ふしつゝのども其御心を押隠し給ひて
然ハ物為させ給はる中ニハ愛の極まて御在り
坐す故あり所以ニ遙望けて大穴牟遲神を呼給ひて
意礼為大國主神亦為宇都志國玉神云々と宣ひて終
小其御本心ハ頭獲し給へれども神性ノ雄健キヲ任
せて少うも顧させ給はざりしが如く凡て此大神の

御行ひ共ハ如此ク雄健ハ御在ハ坐ハ下ハ得ル也云知ルぬ愛ルキ御心坐ルるハ然レバ此雄
 健を以て性の善悪を云ふ論ハ一向ハ云フも足
 ざう者ありけり此ハ又ハ一譬を思附ルなり天下を治ル
 の二有ル如シ文を以テすハ仁義を以テ教を無ル民
 を導キ治スるハ武を以テすハ兵權を以テ威を示シ
 民を以テ背クるハ是即平恕ト雄健ト其
 道ハ水火の違有ク如シ是ハ其本性の善ハ其
 異ハさうハ似タり徳を以テ懐クるハ威を以テ伏
 すルも民を治メ國を安クすハ云フ極意ハ同ト其
 理ハ然レバ性ハ皇祖天神より授給へる靈を
 吾ハ心ハ云テ其心人の心ハ同ト平恕ハ亦
 雄健ハ其身限りテ種ノ氣質有ル者ヲ云フあり

賢を佐加志ト云フ性ハ重シの義ハ人ノ性ハ厚キ
 事其人限りテ能有ルを云フ可ク僻事を佐加志良ト
 云フ性ハ癡キ性ハ神隨ルを好ム者ハ正シきを
 愛テ直キ進ム事を欲スる者ハ却リて事を曲
 げ僻ム事ハ性有ル人の為ニ事ハ性ハの痴レ
 行ハ云フ事ハ傳ハ六ハ十ハ不祥を佐賀那志ト
 訓ハ事ヲ性無シと説クふハ右等ノ語共ハ皆人性ノ
 性ハ本ニ着テ云フを思フ可ク也性字説文ハ人之陽
 生声ト有ル陽氣ハ左氏傳ハ人生始ニ化シ曰ク魂ハ既ニ生ル魂
 陽日魂用物精多則魂魄強是以有精爽至於神明疏ハ
 魂魄神靈之名附レ形ノ靈為魄附レ氣ノ神為魂也ト有ル
 氣ハ附レ陽魂ノ由テ可ク又韻會ハ魂者神也陽也

氣也魄者精也陰也形也と有るを思ふ可し然れば予
 が神に受るを以て靈と云ひ吾が有る成を以て心と
 云ひ其心を生れ着く所を以て心と云ひて差別有るを性
 云ふも此義は合へるを以て然れども説文以後は
 陽魂と性とを一として云ふ説なきは孟訥が性善と
 荀卿が性惡との説に關するに未だ一定の説なきは
 故して双方とも性の説に暗き者ありけり論語
 性相近也と云ひ董仲舒も性者生之質也質樸之謂
 有る○雄健ハ多祁久麻志兵と訓べし此ハ傳八十八
 丁に註せりが如く古事記に建速須佐之男命宝劔出現
 章に武素戔嗚尊とも申奉れる御名御在り坐す其建
 速又武と同一義の語あり者あり第一一書に日神本
 知素戔嗚尊有武健陵物之意と有る武健を多祁久
 志兵と訓たり後靖天皇御紀に今汝持^{スグレ}挺神武自誅^{ウケテ}元

悪に見え万世六^{三十}四^丁に多鷄蘇香仁来有今夜四樂所
 念九^{三十}六^丁に牙喫建怒而加已男尔負而者不有跡十九
 丁^{四十}に麻須良多家半尔美伎多底麻都流二十^{五十}丁
 於保久米能麻須良多祁半半有る多祁某も皆此
 中同ト口訣に雄健者武也^{不為之而然也}と見えたり
 共^此多祁久の多祁も高皇產靈尊と申す高皇
 傳四卷七十一丁に云を見よ 儲此大神の神性を云る
 件を論じ可し四神出生章に此神有勇悍以安忍且
 常以哭泣為行故令國內人民多以天折復使青山變枯
 と有る勇悍以安忍ハ此の雄健と同一事にて悪ク
 ぬを其第一一書に是性好殘害と云ハ心得ず神性の

雄健く御在り坐が為す物を殘害せ給ふと雖も好
して然為させ給ふよハ非ず觸るる所の物自然に殘
害するも亦ハ其れ良ハ一書又第二一書ハ此
神性悪常好哭恚と有も如何不り其ハ其哭給へるハ
其第六一書ハ吾欲從母於狼國唯為泣耳と有が如く
御母國を惡泣せ給へるあり其を指て性悪と云て可
りむむや其神性の雄健く御在り坐が故ハ然哭給へ
るハ就ても人ハ其國ハ害とハ成れり一書ハ皆御
自の御心より然思ふ一書ハ給ふハ非れども自
然ハ然るも其ハ右等を以て此大神の神性を惡しと

ハ容易く申し難けれハ此傳を以て余ハ祥ハ一思
へるあり但其云様の漢のウキハ文ハ引るハ故
取ざる可けむヤ予ハ古より人の此大神を一速び荒
振る悪し神の如く申成り奉るハ心苦しく堪わ
ろし一書ハ斯る事ハ至りてハ力を極めて論事ハ
記者ハ本よりハ事ハて世ハの識者ハ對ひて此大
神の御為ハ許さしハ所あり○使之然也ハ志加良志未給布也と訓
べし此ハ天子昇坐す素戔嗚尊ハ固より然る御心ハ
御在り坐ざりけれども神性の雄健く御在り坐が故
ハ其出立りの御有状多む甚凌兢しうりつれば自然
ありて然有けりとも此大神の暴悪ふる御行ハ依
て然るもハ非りける事を見ハせら文ふる者あり下

小跋^ハ歩雲霧^ヲ申給へる一事を見ても他神の上下^ハ
ハ雲霧^ヲ乘て往來^シ給へるを此神の神性雄健^ク御
在^リ坐^ス故^ニ其雲霧^ヲも任せ竟させ給はず^シ其
上^ニを踏渡^リせ給へるあり^ハ洲起元章第二^ニ一書^ハ二
え常陸風土記^ニ普都大神^ノの徳^ヲ命^ヲ給^フ事^ヲを云^フ不
即^チ乘^リ白雲^ヲ還^リ昇^リ蒼天^ニ有^ル如^ク雲霧^ヲハ乘^テ立^テ給
歩^キ行^クせ給へるあり^ハ借^リ其^ノハ神性^ノの武^ク又速^ク御^レ在
坐^ス依^テ然^ラ有^ルける^ハ子^ハ其^ノ御行^ハひの上^ニを他^ノ子
り見奉^ル時^ハ暴^ク悪^キ神^ノの如^クも見^エけ^ル故^ニ
國^ヲを奪^フふありむ^の御疑^ハも有^ルつれども天上^ニ至^リ
着^シて天照太神^ヲ申給へる御言^ハ右^ノの如^ク跋^ハ歩雲

雲遠自來^ニ參^リ申給ひて御自^ハ此事^ヲ因^テ然^ラ御疑
ふ^レを請奉^リむと迄^ハ御心^ノの着^セ給^リざり^しも
神性^ノの武^ク速^ク依^テ然^ラ餘^ヒ響^キの有^テ國土^ノの震動
くも何^レも其^ノ惡^キ事^ト迄^ハ思^ハら^ず係^ハ給^ハざり^し者
あり^ハ極^メつて正^シく直^キ人^ハ己^ノ惡^キ心^ヲ持^ツざれ
正直^{ナル}子^ハ任^セぬ^レ其^ノ罪^ヲ○素^ハ第一^ニ書^キ日神
本^ニ知^ル素^ヲ奏^シ鳴^リ尊^ニ有^テ武^健陵^物之^意神^武天皇^御紀^ニ饒^速
日命^本知^ル天神^慙懃^云天皇^素固^饒速^日命^是自^天降
者^云ふ^レ紀^中多^ク猶^自本^ニも往^來も固^ニも
書^ハれ^り天孫^降臨^章第五^一書^ハ我^知本^是吾^兒と有

△此事下百六十六
子又之り

今又此暴惡字之用
ハハ天武天皇七年
御紀に詔曰朕聞之近
日暴惡者多在近
是則王御之過也故
聞暴惡者也煩之
思之或見惡人也
儀之匿以不正其
見聞以亂彈者豈
有暴惡乎且是以自
後以後無類倭而上
責下過下諫上暴乃
國永治焉と有り倭
此ハ

る本を汲自米牟理と訓たり此亦て自本ハ自初と同
トキ事を知べし母登ハ最疾モトの義あり歌詞ハ長
ども集ハ本ナリも壑子同○暴惡の字阿良
神子ハ云々有も自初同△
久阿志伎と訓れども字も訓め共子當らず天孫降臨
章第ニ一書子殘賊強暴橫惡之神と見え九た其ハ古
事記ハ道速振荒振神と有と其 訓ハ一あり事みて
右ハ邪神姦鬼を云事あり子強暴橫惡の字を切め
て此暴惡と書れたる甚コナ勿体無き事あり上より漸ハ
説来れるが如く神性の雄偉ハ勇健くころハ御在
一坐け何を以て暴く惡ハ申奉らむ餘り可

畏くて云む言さへ絶る許ふ有けり此ハ彼記ハ
乃參上天時山川悉動國土皆震尔天照太御神聞驚而
詔云云有が如く天を扇も一國を扇も一雲霧を
跋渡り坐る状の夜競しうりつる故ハ驚らせ給へる
みころ有けれ未此時ハ善とも惡とも亦思一分
はらる時ありけれハ争で暴く惡しと定りて詔ニ
事の有む 此ハ天照太神驚曰吾身之末豈以善意乎と
云ハ直ハ疏ハ見ハ古事記と同ト文の樣
あり然れ ハ上ハ此則神性雄健使之然也と有も其本
傳ハ就て地より云詞ハ此ハ然らむハ漢文の
様ハ物為 ハ加ハたつと其
事哀と訓べきふる可ハ彼記
日代ハ倭建命の御事ハ

大祓詞後叙此... 神の類の... 荒備給比健備給比宗給事無志とも見えて此等ハ正一き

就て於是天皇惶其御子之建荒之情と云事有る其子引合せ読むるとも思ひしりとも建ハ右子神性雄健之己小有ハ暴悪の二字を阿良毘と訓て叶ふ可くや有む彼有勇悍以安忍ふとハ御荒びと申さむも強事ハ非ハあり大殿祭詞ハ神等能伊須呂許比阿礼比坐乎遷却崇神詞ハ天御舍之内仁坐須皇神等波荒備給比健備給比宗給事無志とも見えて此等ハ正一き神の上りも云事ふれハ此を以て當れる訓と為へき者あり但荒振神と云ハ右子云る如く邪神毒鬼を云れども荒振神と云時ハ常ハ荒振るを以て行と為る神の称と定むるを荒毘坐と云ハ其事子當りて荒び

見ゆしむと有る是より然れば此時天神の御許も依來坐す疎しく御在坐ける時ふら自然其御心の如くぬ行も御在坐

下ふる来参を麻... 依て定む可

又海神小天神之御... 子不可生海原故参出到也

六子参烟末兵命... 受例藥十

坐す事ハ成て全体を損ハざる者あり○来詣ハ麻章久流と訓り第一一書ハ唯為暫来耳と有る来をも訓り第二一書ハ吾所以来者寶鏡開始章第三一書ハ復上来耳と有る右小同ト古事記高津子有知和多須夜賀波延那須岐伊理麻章久礼と有ハ正一き據あり又白持原故尔藝速日命参赴白於天神御子又日代宮段於朝夕之大御食不参出来と有ふと皆同ト参と来とを重ね九言ふ者あり万葉十九子参来之印毛有香と有ハ参来の為派許之登吉二十子麻為互和麻之平○状ハ湍渤鼓と有ふハ参来の間子出の言有ふ○状ハ湍渤鼓と有ふハ山岳鳴响ゆ有状を云ふ此ハ天孫降臨章

△古事記ハ八卷至
于前帝仲任知位也
と云々其法状者
云々事ハ夫を細く
述べてを以て状ハ其
眞実の具と指す者
と明せし由と合せ考
ふ可一又

第一一書ハ具陳不降之状と有る状を以加多知ハ訓
ハ悪ウリ佐麻と訓ハ一統記第一詔ハ故如此之状半
聞食悟而歎將仕奉人者其仕奉^{礼良}年状隨品之讚賜上
賜詔將賜云々第二詔ハ汝藤原朝臣乃仕奉状者第
七詔ハ細事乃状語賜止詔第十四詔ハ此状悟而人乃
見^可答事和射^奉世第二十七詔ハ朕行年加久能状云々
と有り桐壺卷ハ状異ふる御持成ハ小依てころ云々
とも見ゆ言義其^サ実と云事ふる可一有状と云ハ有其
実ふる可く様ハと云も其通の事實の幾許も有を云
ふる可一若て佐を其と云ハ其眞実ふる物を其と指
定めたる義ふるが故あり加多知と云事ハ

神世七代章第二書ハ見え
たりを已ハ傳四卷み云り
○至聞ハ二字を引合せて
伎許志賣志氏と訓て至字ハ訓べうらざるふり然訓
む時ハ皇國の言語の状ハ非ず借此を古事記ハ
山川悉動國土皆震尔天照太御神聞驚而と有て御直
小聞食一驚うせ給へる趣ふるを此ハ然らず素戔鳴
尊の神性雄健く御在ハ坐ケ為ハ殊更ハ荒びふど為
給ハむの御心ハ坐ざれども甚物駭^ガ一きハ恐れて
其来詣^ル状を奏聞せし神の言を此みて先聞食一て
驚うせ給へるあり宝鏡開始章第三一書ハ逆寝扇天
扇國上詣于天時天鈿女見之而告言於日神也と有を

皇異記の勃
然ニ合忽也と有
不依て多知麻
知ると訓へく
思ゆ

合せて曉る可但其子延後と有て再上り坐る趣
入錯ひたり者おれハ誤あり此時の御事の然
心得無てハ有べり○勃然ハ佐加理尔と訓は但
勃然ハ文選注ハ怒也と有ハ泥て纂疏ふとみも怒
多也と註させ給へれども然らず此時ハ御疑の御心
ころハ御在ハ坐けれ未御怒を發ハ給ふ可き所ハ非
レハ強く驚らせ給ふを云あり惣て物の甚一きを盛
と云ハ統紀第廿二詔ハ愛盛尔一人等尔冠位上賜万
葉五三十一丁ハ神奈我良愛能盛尔と有ふども愛事の
強く甚一きを云あり花の咲く時の甚一きを咲の盛
と云ひ長トとあり世時めきて甚トく為らく時頃を盛年

と云ふども同ト義あり者あり然レハ此ト勃然而驚
曰と有ハ上章第六一書ハ大驚之曰と有ハ意ハ然耳
異トりトけり者ありをヤ然レハ斯トる所ふと字ハ泥
多在り孟子ハ勃然變乎色と有ハ合トせ説く可トらず
名義枚ハ美陀流又伊佐年又麻加流又尔波加ハふと
云訓の有をト○驚曰ハ古事記ハも尔天照太御神聞
考合す可ト驚而云トと有り此言義傳十百五十丁ハ云り次ふる宝
鏡開始章ハ驚動ヲトコシテと書れトレハ音轟オトコシと物トの音を
聞て恐れ騒トぐハ出たる言あり可ト上七十丁ハ云る鼓
の註をも合せ考ふ可き者あり威權の字ふとを於杼
須と訓ハ源氏物語ふとト於杼ト呂ト志ト字と云語

の有も皆此類あり 又物語ふごとく何事が出来ん此事
へたる事を於抄志 を言出して驚ろく一苦トめむと稱
具佐と云事も見ゆ ○吾弟ハ古事記ハ此を我那勢命
之上来由者云と有り依て訓せたり第一一書第二
一書及宝鏡開始章第三一書ふとも往る見えたる
も同一上章第六一書小吾夫君尊又吾妹ふと有ハ御
夫婦の御間ハ云事ふを此ハ御兄弟の御上ハ
申せる多り仁賢天皇六年御死ハ古者不言兄弟長幼
女以男称兄男以女称妹と有が如く此神ハ日神の御
為子ハ御弟子坐せり吾那勢命と宣給ひ又古事記
ハ須佐之男命の御言ハ吾者天照太御神之伊呂

勢者也と他ハ對ひて宣給へる事有る是多り 古今集
此神の御事を天照太神の勢字登りの神ありと 序ハ
云り勢字登ハ兄人ハて此の吾弟と云ハ同ト ○来ハ
第一一書小弟所以来者下章第三一書吾弟所以上来
と有り古事記ハ上来由者と有ハ依て来字を能煩
理伎麻世流許登と訓べ一然るハ上ハ十ハ引る如く
来字をも麻草久流と訓る例も有ハあり又上ハ乃
昇詣之於天也と有り此ハ至聞来詣之状と有りハ
必右の如くありてハ語の調も悪く又上下の照應
も宜しくりざるが為あり 本ハ伎多流許登と有ハと
言あり何方も古意を求ハ古語 り無下ハ鄙ハ俗ハ
を原ハて善ハく訓附ハ事あり ○豈以善意ハ

豈宇流波斯伎意麻佐米夜母之訓べし第一一書非
是善意下章第三一書非復好意之見古事記も必
不善心と有り記傳七三十三善心ハ師の宇流波斯伎
心と訓れぬるハ後三句一此語ハ書紀神代下卷ハ友
善之有を此記ハ愛友カレトモと有り善字の意ハ漢籍ハ
も如此状の善字ハ古より宇流波斯之訓リ人の交
ひの睦よりハて異一善心無きを云ハと有るハ実ハ
然る言ある此事傳十卷六十一丁ハ云ハるも見合す
合せて此ハ阿加伎心と訓べくハ思ハれハるも猶
思ハバ書紀ハ彼所をハ善意又好意之書ハ本ハ彼
ハ別言と聞えたり云ハれハるも実ハ其ハ説あり

此傳十六ハ注
セリ

○謂ハ於母布ルと訓リ其来詣る状の甚健く荒きハ
就下所思ト遣レセ給ふあり此字の例ハ神武天皇御
紀ハ聞於鹽土老翁曰東方有美地青山四周亦有乘天
磐船飛降者余謂彼地云々厥飛降者謂是云々歟と有
と同ト格あり如此く人の状態ハ依リ其の所言ハ依
と其心を推量るを謂ハ云ハるあり此を唯ハ漢文の
格ハ思ハるハ
らず他人の狀態を見又其所言を聞ハ何れの人ハ
其来由を思ハるハ此ハ其考て如此もハ思ハる取
事あり ○當有奪國之志歟ハ國衰奪波牟登須留志坐
流加毛と訓べし第一一書ハ必當奪我天原と有ハ如
く國之云ハ即天原を云あり下章第三一書ハ必欲奪

今統記第九部天
嗣高即座并加糖比
奪村逆止為而惡
逆在久奈多夫礼
麻度比之身世詔
子逆在攝政叔神未言
平新流心乎以天兵
平新流心乎以天兵
天鈴印乎奪復皇位
平掠天云こも有て
奪ハ掠ら小逆き語不
り

我之國者歟と有る古事記も右に同く欲奪我國耳
 と有り記傳七三十四子万葉五十九子由吉能伊呂遠有
 婆比丘佐家流有米能波奈てふ言見えたり偕此句我
 國表奪年登於母富須爾許曾て訓べし例に引ハ畏け
 れど神武天皇御紀に長髓彦聞之曰夫天神子等所以
 来者必将奪我國云こと有る語の状克似たりと云れ
 き猶其下にも何更稱天神子以奪人地乎と有り又古
 事記玉垣子尔天皇悔恨而思作玉人等皆奪其地故諺
 曰不得地玉作也と有て得と奪とを照し應せて書れ
 たり故思ふに字婆布ハ得延ワダみて我地より延及不ヒキガコ

て人の境をり得て我有と為るの謂も有ぬ可き又
 奪と云事有り此ハ授るふり受るふり奪の本ハ其不
 れども篡奪と云時ハ奪國ふり同ト白虎通と云物
 篡猶奪也取也言庶奪嫡襲奪宗宗○志ハ字の如く訓ハ
 引奪取其位也と云る事有ふり○志ハ字の如く訓ハ
 心の指赴く所を志とハ云ふり上よ以善意乎ハ大
 凡の御心を云ひ此ハ天原に流び健びて升来坐る其
 御心の指赴く所ハ奪國歟と疑給へるあり古今集に
 心ざし深て深て折けれハ消敢ぬ雪の花と見ゆ
 む拾遺集物名に佐須賀を隠し心佐須賀を忍べと
 ぞ思ふと詠らふと此志を云ふりコサシ説文に志意也从心
 出出亦声と見えたり然れハ志ハ意ハ同トコサシ説文に
 意志也从心音察言而知意也と有り意ハ心走コサシり此

も心の走て行く所を云あり拾遺集物名に芭蕉を心
 婆せ表婆と有り漢籍に多く誠意と有る類然訓り
 ○歎ハ疑の御辞ふり第二一書に天照太神疑弟有悪
 心と有が如く天照太神ハ素より素戔鳴尊の健く荒
 び給ふ御事ハ知者つれども天上に昇詣坐す御事
 子就ても疑ハせさせ御在り坐ざりしを此度の御有
 状の餘り子驚きし御有状ふりしにバ此に至て始
 て御疑の大御心出来させ御在り坐し者あり然れば
 此歎と下章第三一書ある必欲奪我之國歎とハ其
 意味を得て知べき所あり者あり備素戔鳴尊ハ然
 る御心ハ御在り坐ざりつれども然疑ハれ奉給へり

合致し御誓の御事
 出来りて笑み清く
 明く御在り坐
 かり

一御心を明くの申すに至りて高照る日延の御子を
 相共小成し出奉らせ給へりしにバ此御疑の起れる
 も其を明くの申すも共よ得去ぬ道有て然ハ成行し
 者よて其も此も皇祖天神の相預坐す御靈に因れる
 事よぞ有べき然れば此歎の御辞ハ此章に有ゆる御
 可き所ハ非事の始より起り容易く見過し奉る
 りける者あり○夫父母既任諸子各有其境ハ四神出
 生章に所見ある珍子等に御事任りの有つる御事不
 り父母を加曾伊呂波と云事傳八八十五五丁に云り此に對
 へて此事を下し但父母已有嚴勅云こと有り○任諸
 子ハ上章第六一書又第六二書に伊弉諾尊勅任三子曰云こと有

小諸子ハ皇太神ニハ御同胞の神ニハ御在リ坐せて
也此ハ其御父母の御事ニ對て然宣へる者あり任ハ
許登與世兵と訓り古事記ハ汝命者所知高天原矣事
依而賜也又汝命者所知夜之食國矣事依也又汝
命者所知海原矣事依也と有る諸子の御事依レを云
ふリ傳十卷四百六十丁ニ勅任の事を委レ註せし
ハ其を合セ讀ム與世ハ與佐斯を切ル由人
ガ知ル也○各ハ已母ニ已母ニて天照太神素戔嗚尊二
柱の御事あり此珍子を三柱と為て別ニ月夜見尊の
加ハリたりハ其亦名ありゲ二神の如く傳ハれり
て其誤あり事傳ハ四丁より始て次ニ説明ルめたり

か如ク古事記ニハ此を故各隨依賜之命所知者之中
速須佐之男命不知所命之國と有を此ハ天照太神
の御言と為たれども皆ク古語の状ニ非ハル意
を得て加ハりテ文ヲ有むル夫父母ニ云フとすル敢
二十六字殊更ニ耳立ちて聞ク思フ也○其境ハ日神ハ天
上素戔嗚尊ハ頭國と事依され奉給ひて其所知者す
其限を佐加比トハ云あり神武天皇御紀ニ邑有君村
有長各自分疆用相凌蹀と有る疆を此ト一あり万葉
六丁ニ小大王之思賜跡山守居守云山尔不入者不止
と有も其封ヲ封シ我領居る限を以て思ハ云フ不

今名義抄ニ加波理ト訓ル

成務天皇五年御紀
 二隔山河而分國縣
 隨所詣以定邑里
 有て令諸國以國郡
 立造長縣邑置郡
 置之有ハ各有其境
 と云ハ似多事多
 又天御天皇十二年御
 記小巡行天下限分
 諸國之境域ハ有
 リ右の隔ハ限分
 とも境域ハ有
 佐加比ハ訓リ借

一五三十一丁 小唐能遠境尔都加播佐礼麻加利伊麻勢九
 三丁 小遠津國黄泉乃界丹蔓都多乃各々向て天雲乃
 別石往者多と有ハ其往至る限を然云多あり借境ハ
 云事公姓氏録撰津國皇別 小坂合部連大彦命之後也允恭
 天皇御世造立國境之標因賜姓坂合部連と有り如く
 國境ハ坂と坂と合ふ所ハ定たりと因て其界を坂合
 と云事と聞えたるが上代より地界を定むる古法不
 る可但然り 頸國にて遙く後より出来り一事を以て
 皇太神の宣給ハむ事如何あり然レハ各有其
 境ハ各有其國と輕く○有を多母都と訓り牟持の義
 見ハ有ぬ可く○有を多母都と訓り牟持の義
 あり各其境を分て所知食さ令給へり御事あり○如

何ハ古事記ハ何故上来と問給へるが如く少尤め給
 へり意味有り斯る例猶多一同記ハ何由以汝不治事
 依之國而哭伊佐知流又ハ何由以天宇受賣者為樂亦
 八百萬神諸咲とも何至于八年不復奏或ハ何虚空津
 日高之泣患所由と有ふと物を問係る中ハ尤むる方
 を主として云格あり所あり俗言ハ此伊加爾曾て
 牟叙夜と云て人を尤むる詞今云事を奈牟叙と云ハ奈
 ゝ世ハ用ふる即此如何と同一○當就ハ志良須倍伎
 と訓へ一撰者の御心ハ上ハ吾今奉教將就根國之有
 を兼て書せたる可けれども其ホてハ合の事有り下
 小日神の問給へり一所ハ父母已有嚴勅將永就根國

云々に見え古事記ハ殊ニ委レクニ爾速須佐之
 男命吞白僕者無邪心唯大御神之命以問賜僕之契伊
 佐知流之事故白都良久僕欲往此國以矣尔大御神詔
 汝者不可在此國而神夜良比々々賜故以為請將罷
 往之状參上耳云々有が如く此より後素戔嗚尊
 と申させ給へるに依て所知一食ける御事にて此時
 の日神の御心ハ我ハ此天原を所知食す神あり素戔
 嗚尊ハ天下を所知食す神あり其治す可き國を除
 て此に上來坐るハ云々と思食して如此宣へる所不
 レハ當就之國を根國としてハ上下の文と別て成

今又口訣小管就之
 國根國也云々も誤不
 る事右云々如く考

今又口訣小管就之
 國根國也云々も誤不
 る事右云々如く考

竟る者ふりや又此ハ父母既任諸子ハ然ハ事ハ
 己有嚴勅と云々も甚ハ正実の旨も合ぶるあり
 ○棄置ハ上章第六一書ハ素
 戔嗚尊者可以治天下也と有る天下を所知食し御在
 一坐ずして天少參上とせ給ふが故ハ其天下を棄置
 せ給ふる物を棄て置が如くハ其事を忌給へるを
 云り万葉五八丁小卒都呈二波死波不知十一二十
 小古衣打棄人者又八丁靈治波布神毛吾者打棄乞之
 有に依て卒都民於伎民に訓へきあり○敢ハ下ハも
 吾何能敢去と有り口訣小敢強也と註せるが如く此
 を歌詞にも用いて万葉三四丁小安倍而擲出牟尔波

母之頭氣師九丁八小白神之磯浦箕乎敢而擲動十七丁二
丁子布奈太郎宇知底安倍底許藝泥米ふと有ハ強アキチの
 あり意あり又十一丁二十子人心者間守不敢物又四十
 白濱浪乃不肯縁十五丁二十子安伎佐礼婆於久都申之
 毛尔安倍受之豆十八丁十七子宇麻尔古非許婆尔奈比
 安倍年可母十九丁三十子可久古非婆意伊豆久安我未
 氣太志安倍年可母と有ハ物子堪るを云あり名義抄
 小敢を阿倍氏とゆ延レ之麻加須とゆ須レ年とゆ於
 加須とゆ加志古麻流とゆ訓り此レて其義を明レむ
 可レ和訓栞子云敢ハ堪テと通へり不憚ト譯す進為也
レ註せり敢告天地之神ふと云ハ轉トて不憚ト

意あり不敢ハ敢て何せずと訓レ敢不ハ敢て何為レ
 りむやと訓むの例あり又肯を訓り納得する意あり
 と云り可也と注せり又不敢ハ不果あり不果ハ十分
 ありぬを云り又阿倍那志ハ物の荒き事と云り河海
 小無敢の○此處ハ右ハ奪國と有る國とて即天原を
云然ハ天國と訓ベキ
 云あり○窺翁ハ宇加賀布あり穿考るの義あり可レ
 口訣ハ窺小見翁穿也と云ひ纂疏ハ私視也と注させ
 給へる如く私子其間を候ふを云あり万葉八四十小
 此岳尔小牡鹿履起宇加塗良比十六丁三十子窺良布跡見
 山雪之ふと有る宇加祢良布ハ窺狙子を云り此も其
 本一あり言あり可レ通證ハ漢書叙傳曰隴西隗囂
 翁文選註翁典然れども此ハ甚レ味氣無き言あり者
 窺同と見ゆ

ふり此神御父大神より御許を得て天に参上り給ひ
根國に罷ふむと為給三状を申させ給ひし出生一事
よハ有れども其神性の雄健が為り湏渤鼓盪よハ山
岳鳴响へて甚驚こしつるに依て我天原を奪ハ
むと思ふすより日神の御疑ハ受奉らせ給ひし
ども私に窺ひて日神を粗奉るふと云状あり御事ハ
しも御在し坐ざる中世の如何ある人々然る僻事
ハ書入て日神の御上りの素戔鳴尊の御為ふも有べ
くも非ざる祥ふ事ハ交へしりけむ夫父母云こより
此句に至る迄の二十六字ハ古事記又其餘の一書の

趣ふも合ず決りて古傳に非ざる者あり可名義
窺を字加賀布とも能叙久とも比曾加とも波加理許
登とも有り又窺ハ穿也とも盜也とも註して字加賀
布と訓り何ふして此件似着しりざる者あり○乃云こハ第一一書に乃
設丈夫武備云こと有り下章第三一書に吾雖婦女何
當避半乃躬装武備云こと見えたるを此と古事記ハ
其武備を大御身に整装ハ給へる御有状を委曲
小傳にりし者あり○結髪為髻ハ第一一書に設丈夫
武備と有が如く大御身の萬事を丈夫の装マストラに成させ
給へる初ふり此ハ神功皇后御紀に吾婦女之加以不
肖然整假男顔強起雄略と有て其先小皇后還詣檀日

古事記曰代官設...
命の能曾と取小出坐
所小當此之時其御髮
結額也と有ハ御髮の
御事より其下如堂
女之髮梳其結髮
と有ハ此月てハの状物
給つて此の事あり

浦解髮臨海日云ニ是以今頭濮海水若有驗者髮自分
為而即入海洗之髮自分也皇后便結分髮而為髻之有
之同ト御状あり者あり此事の御古事記ハ即解御髮纏
御美豆羅而之有ハ記傳七四三ト今此ハ解之有を書
紀ハ結髮之有解之結ト大違へるハ似たり故猶
考るハ先凡て女ハ年長て髮結るハ上代よりの義ハ
るハ飛鳥淨御原御宇天皇十一年詔ハ自今以後男女
悉結髮之有を思ふハ上代ハ結ト云ハ本を一ハ聚
ハ擧て結て其末ハ後へ垂たりけむを彼詔ハ結ト有
ハ頭上ハ結ハ館ねて髻モトリト成すを云ふる可ハ髻モトリトハ

一ハ館ハちちを云ふハ彼男のニハ分たる美豆良ト
ハ異あり備同十三年ハ女年四十以上髮之結不結
任意也ト有て又朱鳥年詔ハ婦女垂髮スベシモトリ干背猶如故ト
有ハ彼上代よりの風の如く為とあり此十五年詔
以後の方葉の歌ハ髮結カキアケる事を多く詠るハ彼本を
結ト事よて末ハ垂るハハ彼詔ハ違ト事無ハ備此
ハ解ト有ハ彼本を結たる所を解あり神功皇后の解
髮ト有ハ是あり書紀ハ結髮ト有ハ末の垂たるを擧
てあり斯レハ言ハ異レども実ハ同事よて違へるハ
非ず此事能せずハ人の思惑ハ可き者ト云レたる

ハ彼記の解御髪と此の結髪と互りて甚明り不
る説あり者あり 此子就て御記を再読見らば右の十三年詔の終に別巫祝之類不在結髪之例と云文有り其ハ巫祝ハ神に奉仕者あり故に右の十一年詔の時にも結髪之例ハ入ざり一ハ神代より任に垂髪干背は合結給ひて然るは文武其意ハ任する事を許されざり一あり 然るは文武
天皇御紀に慶雲二年十二月乙丑令天下婦女自非神
部齋宮人及先姫皆髻髮 語在上前紀 と有ハ右の十一年の
御定に互復れりあり語在前紀とハ其を指たるあり
然れども此も被行れずして猶故の垂髪にてこり有
けり一儲婦人の髪の様ハ縣居翁の説も有れども今
惣云むは先甚幼女 幼女ハ 多る時髪毛額 ハ垂 小至る頃を目刺

古今集 一目刺を小餘綾の磯立 ハ磯菜摘む目
刺濡す沖に折れ浪 見えたる名義抄に髻を米部志と見え髪を然 と有り是あり次ハ其より立
延て其髪之頭至る程を髻髮 ハナ と云ふ万葉十六 ハ小
三名之綿故黒為髪尾信挿持於是故寸垂取束攀而裳
纏見解乱童児丹成見と有て取束て總角と成解乱
一て髻髮とも成 一て其程ハ攀も垂も格好の巨一と任せたる状 あり和名抄小髻髮和名宇奈為俗
用垂髮二字謂之童子垂髮也と有り 然ハ右の髻髮の頃ハ攀束の
て總角も為し者ありけり和名抄に總角和名阿介
萬岐結髮也と有り然れば女も幼稚き程ハ結も為れ
り 一ハ 若て其髻髮の頃ハ髪を二小振別て垂たりけ
り一万葉十一 ハ 小振別之髮半短弥青草髮尔多久

ハ挿を以て髪を衰け結る由よこ此擣ハ右子髪多久
と有と同一語あり十一^{二十}ハ^十妹之髪上小竹葉野之
と有を冠辞考小髪を結ると係れり^中八年児迄ハ未
短く剪て有を其過ても末を結んで下ハ搔別て置け
バ放髪とも振分髪とも云を能程^生でハ額を上へ
搔上て中を結て末をハ^ス一のりとも見ゆ此を髪を
上とも結とも搔入とも云ふ可しと云れたり然れ
バ上^{九十}子云ろが如く古子髪を結と云ハ本を束
ねて後ハ^{オホク}垂るを云ふり狭衣子御髪ハ行方も知ず^艶
いと委^{タナ}ハリと見え今も須陪良加志と云ふ有状小

不有けり然れバ慶雲の度小詔有しりども猶行ハ
れざりけり小^{北史倭傳}男子^束髪於^後兩耳上^婦婦
国婦人髪長敢披^後と見え全^浙矢^制日本風土^託子
女子富貴者披髪^緇負^常以^髪束^髻以便^二用^と有^り
通證^兼俱^日古俗^婦人束^髪於^額上^垂餘^於背後^以
挿^挿也^今宮人^謂髪^縮者^此体^也と云り考合す可し
○為^髻ハ古事記^ハ解^御髪^纏御美豆良而乃於^{左右}
御美豆羅と有と此ハ結髪為髻と有ハ結束ねて^垂
一給へり御髪を解して御髻^小上給へり由右^{九十}
云ろが如し御髻の左右子在る事ハ此第三一書又下^六
章第三一書子明ふるを猶古事記の黄泉國段御字氣
比段共子所見たりが如し記傳六十一子御美豆良ハ

上代子男の御装ふて髪を左右へ分て結縮ヒカぬたる者
 あり書紀子息長足姫尊の權日浦ヒして御髪を解し
 て海に入洗給いて占給ふ御髪自分れたるを即其
 分れたる任に結て髻と為給ふ事有るも假に男貌と
 為給ふありと見えたるが如し纂疏子国俗婦人垂髪
男子縮髪故縮髪之髪
 而假男子之相也と有るが如く大丈夫武崇峻天皇御紀小
 の武く雄く御貌作給ふあり既戸皇子束髪於額之有る比佐基婆那志氏と訓て其
 本註に古俗年少兒年十五六間束髪於額十七八間分
 為角子今亦然之と有り此は景行天皇二十七年御紀
 子遺日本武尊令擊熊襲時年十六と有るを古事記に當

此之時其御 髪結額也と有る此は御年を云さる
 が故に御髪の結様を以て御年を知せたる者ありとて
 右に十五六間束髪於額と云るは合するあり然れども
 十五六間と有る幼稚き時より其間に至る迄と云事
 又十七八間と有る壯年より老長に至る間と云事小
 て此よて髪の結様の異る事を云らして古俗年少兒
 ハ束髪於額と云迄は係れり耳ふたを曉る可し然れ
 ハ万葉十一十二子肥人額髪結在染木錦染心我忘哉
 と有る額に髪を束めりハ年少の事にて長てハ角子
 子結ふ事ありと肥人の何時も同トきを笑へるあり

此は天皇御紀に
 自下及此病と見
 えたる病は髪と見
 て童形の御時と申
 然る所の束髪於額
 の御時と申し壯盛
 と訓て廿歳以後の御
 年中に束むる髪と
 を知る是れなりと云

下は我志哉と有を以て聞く可き歌あり然れば古と雖も年少あり時ハ額上より一方に結束ねて瓢花の如く物為たらし事よて其を分て髻に結らハ壯年より後の事あり者あり上引る万葉十六卷竹取翁歌小信解乱童女兒成見と詠る分如く振分髻の頃の子の髪ハ却りて總角に結たり趣あるは考合す可き者なり右の角子即美豆長由託傳に云れたるが如し万葉七二十ハ丁子青南髪アラミツラヨウミンラ依網原と有を冠辞考す神代紀の蔓よて莖も葉も世子青ければ然云係たりと云れたれども委しうす青角髪ハ青実蔓と云事よて其

實ハ即匏の事あり若て十五六間束髪於額ハ年少の時ハ匏花の如く結び十七八間分爲角子と云ハ壯年よりハ匏実の状小結り少く花より実に移るを云ある可し若て推古天皇十年御紀に始行冠位云に并十二階並以當色絶縫之頂撮捻如囊而著縁焉と有也囊の如くして覆へる耳と通ゆれば角子の状ハ異しざりけし万葉二十二十九丁子阿母乃自母多麻尔母賀母夜伊多太伎豆美都良乃奈可尔阿敞麻可麻久母と有る此ハ天平勝宝七年の歌あり小冠を著る倫ハ猶髻みて有し趣あり通證ハ右の御紀を引て此史倭傳曰男子髻髪於西年

上至階其王制冠此也云々天武天皇御紀曰男女始結
 髮仍著漆汝冠蓋至此男子特留婦女亦束髮云云
 諸記傳子右の万葉七の角髪を引て左右に在る角の
 如くあり故に斯く稱ハ有るりと云れたり右の角子
 又ハ總角^{アゲマキ}ふとよ角字ハ書る皆其意あり口訣ハ為
 警者結髪左右也と有る是あり和名抄ハ警和名毛止
 と利警也髪和名美豆良一云訓上同屈髪也と見ゆ源
 氏胡蝶卷^三子揖取^{カケトリ}童子^{コウハ}皆美豆良結て云々藤裏葉卷
 二十子例の美豆良小額許の氣一きを見せて云々
 六丁子見えたり然れハ橙卷^{チヤウ}十九子圓^{マロ}りれたる御額髪云
 夕霧卷^{スヤキリ}二十子御額髪の濡圓^{ヌレマロ}りれたる云々と云ゆ

一名美抄ハ髪を毛
 止利と有て美豆良
 云訓無一傳大卷
 十七丁云々

耳前^{ミミサキ}猫寄^{ネコヨシ}す可

右と異ハ非可一右み引る肥人の額髪の如く子
 リハ額子寄せて結ぶ物多故に美豆良ハ額計の云
 こと云ひ又其所在を以て御額髪と耳も云ふ可一
 江次第 條ハ幼主之時^{トキ}童鬢^{コウ}頰^カと有る鬢頰ハ美
 豆良を訛れり事已古説の如くあり俗に耳の邊
 を鬢と云へハ終^{ヒニ}子鬢^{ヒニ}の蔓^{ツタ}と云物の如くみ成れり
 年中行事装束抄子鬢頰事^{ヒニ}先髪を二子分て耳
 の筋も耳より一寸を開て^{アケ}下結^{シメ}を為べ一髪^{ヒニ}の裾^{ソコ}子出
 可 其上を紫の紐みて^{ヨリ}糸^{イト}にて^ヒ太^ヒさハ箸の程
 ありを長さ三尺許有るありて結目の小結びハ為れ
 ハ此ハ主上の御總角の結び様あり曲^{マカ}の方を前子當

此髪を毎々整理
と云ふ同下其傳十
八付と云

此ハ曲の長さ一寸許りて童女のハ唯米乃古ク
前へ筋違たる様にて両方角の様にて有るは備曲系
りぬ方ハ後へ向て六寸懸りりて二筋下りて有る
しと有り又主上御總角事地体ハ此定小結たるを御
髪クミの裾を云ふ分て二をバ組合せて上へ攀ぐ可し備
今一よて攀たる本を纏ふ可しと有て美豆良ハ髪類
よて即總角の事ある者あり此は上代の髪の状態を
知べし此書本名助無智
秘教と云て作者詳あらずと雖も四五百年以上出
来たる者と所見たり美豆良の結様を委しく託せる
書此ハ勝れる備和名故ハ總角知名阿介萬岐結髪也
ハ有るべしとす此ハ有るべしとすと有り備古と云ふ美豆良ハ髪を二に分て結ふ事あり

うゝ其両方に分れたる状角ハ似たり其組緒又ハ纏
糸の縮ぬ餘糸たるが總フサハ似たる故ハ總角アケマキの字を用
ひたりあるが古事記ハ解御髪纏御美豆良と有るが如
く結ヒキて纏マキくを云り然れハ束髪於額ハ瓢花の如く結
ふ事あり為角ミツラ子ハ瓢實の園ミコカレ在たるが頭子兼カれる如
きを云て其ハ形容を以て號するあり訛れるあが髪
類ハ鬢の側ハ結る由りて其所在の稱あり總角ハ髪
を上げて纏く申りて其所ツガ為る因ハなる名よて皆各別な
る義有て稱する所ある者あり宇治拾帖ハ總角と云卷
名有て歌ハ總角ハ永き契を結び籠め同ト所ハ寄る

逢ふむと有ハ總角ハ角の如く両方子存る物不る故
 子一子結合せむと云ふ仕立あり中古子ハ女も童形不
 り一子間ハ總角あり一子長小随ひて其を一子してスベシトリ髪は為
 る事子係たるを味ふ可し文選注ハ總角を童子之髻也と有リ諸古き節用集ハ
 都能麻伎と云ハ巾フキとも解とも總角とも書リ巾ハ
 も詩注ハ幼稚而角兒と有ルハ總角を角鬘とも云ふ
 リけり此ハ就て考ふる奇宮式ある外忌詞七言の中
 小優婆塞稱角答と有ル弓の角答の名を借用ルルハ
 るハ有ルと云ハ此ハ巾の事○裳ハ美毛と訓へ一古事
 記御身段ハ次於投棄御裳云ニ又日代給其姨倭比賣命
 之御衣御裳云ニ服其姨之御衣御裳と見え皇太神宮
 儀式帳ハ耶自賣神社大水上帝祖命形石坐又同御玉

御裳乃須籬比女命形石坐と如此く御裳を以て御名
 子負坐る神名も御在り坐あり但此ハ倭姫命世記ハ
 鈴之河上仁遷幸于時河際仁天倭姫命御裳喬長計加
 礼侍介苗弘洗給陪利從其以降號御裳須曾河也と有
 ルハ其地名子因て然和名枚上曰裙下曰裳和名毛
 絲へたる神名と聞由和名枚上曰裙下曰裳和名毛
 と有り太神宮式御裳束の中ハ帛裳四腰長五尺著紫
 羅裳長廣裏と見え度會宮の御ハ緋裳一腰帛裳一腰
 紺裳一腰絹裳一腰各長五尺齊長五尺吳錦裳一腰小綾
 紫裳一腰紺裳一腰倭文裳一腰各高三尺五寸齊長五尺
 と有り猶諸別宮の御ハ錦裳紫紋裳裁替裳と有
 り右等ハ古ハ天皇朝廷にて貴人の用させ給へる御装

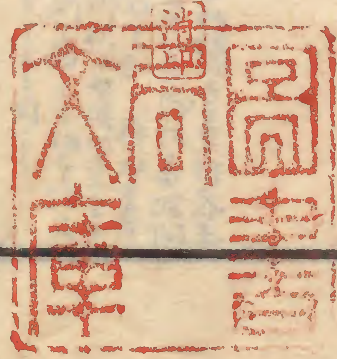
束の如く調へて進らせ給へるあり右の如くは長ハ
 五尺許ふれども腰長ハ一丈 三尺あり有れば二重ハ
 必腰を廻る可く製れりけり猶麻まで製れらるを麻
 裳と云ひ袴てハ玉裳とも云り万葉一 二十 朝毛吉
 本人之毛二 三十 朝毛吉木上宮と有ふとハ何の事
 とも知れざるが如しと雖も四 二十 麻裳吉木道
 尔入立七 十九 麻毛吉木川邊之九 十九 朝裳吉木方
 往君我十三 二十 朝裳吉城於道後ふと有て此等ハ
 正字あるが麻裳吉より着と読ける者あり又玉裳の
 例ハ 一 二十 憾孺等之珠裳乃須十二四宝三都

良武香二 三十 且露尔玉藻者埜打夕霧尔衣者沾而
 九 八 紅玉裙須菴延と有ハ古ハ裳ハ珠を飾らる
 事有しより云るまで珠衣玉襟珠簾ふと云し同ト此
 子就て思ふ子 二 四十 子玉藻吉讀岐國者と有も右子
 引る玉藻者埜打と同ト藻ハ借字まで玉裳吉あり
 けり若て讀岐へ読けらるハ指貫と云へ係て玉藻を
 着たる貌を云ふり和名抄ハ奴袴を佐師奴扱乃波賀
 萬と元ハ唯足を指貫く耳子起れる名ありけむ子考
 合す可き者あり 冠 辞考子朝毛吉ハ淺葱てふ色の事
 ありむらと云れ玉藻吉ハ玉藻よと云て奴と読けら
 りと読れられとも迂遠ある説ふれば諾ハ難し猶傳

此纏字是行天皇
二十八年御紀由波間
為訓神功皇太后
御紀由波比豆全
訓て俗にも物を結つ
るに云ふ同し

十卷二百十八丁子御裳の事を云ひ二百三十四丁子
御禪の事を説く件云々如く波加萬と云ふ履裳と
云事もて衣の下を裳と云大名あり一ヶ故子婦人ふ
くても男子の裾をも母須曾と云々をも思合す可し
然れども打任せて裳としもし纏ハ比伎麻都比兵て
云ハ女の服子限れ者あり○縛ハ比伎麻都比兵て
有り引纏ハ一給ふ義あり御裳の裾ハ一口ありけれ
バ引絞りて二口成し給ひ御袴子取成して御させ
給ふあり○為袴ハ御裳を引絞りて直子御袴子取成
させ給へるあり借古事記御身伊邪那岐命の御服の
中ニ次於投棄御裳と有る次ニ於投棄御禪と有り御
禪ハ然る事ふれども御裳ハ女服あり疑ハし事ふ
くし當時然計の事子暗き世代ありざるを以思ふふ

其ハ重複アヒカサれども違無き事ふれども古子男あり裳
と云し證ハ立べきあり上章第六一書ハ御裳の事
無くして投其禪と有ハ甚正しハ有れども男女の
服の判然し分れたる後の状あり者ふむし然思ふ
由ハ此子固より袴てふ物の有ふむしハ御裳を脱し
てこ御袴ハ召替させ給ふ可き事ありし然るし
此子假初し御裳を縛ハせ給ひて物為させ給へしむ
よも其ハ袴の如くあり物て真の袴とハ別ある可
きし為袴ハ直し袴と成れしと治定て云し口氣を以
思ふし久代伊弉諾大神の項より有来れるハ即連幅ヒロ



の裳より有けむを天照太神の武き備を装^{ツク}り給ふ為
 引絞^ヒり纏^マハセ給へりより袴と云物ハ出来^ルル
 を本より雄略^ヲし御有状^ヲ装^ハセ給へりより其
 より裳ハ女^ノ袴ハ男^ノ 着^ベキ物と世の推移^ヲ任
 じ何時^ニも無く定^リけり物あり可^クし儲^ル裳ハ下^ニと云事
 と通^ルゆれば衣を上^ニと云ふ對^シあり袍^ヲ對^シへて袴^ヲを唯
 下^ニと云ふを思^フし袴ハ西^ノ足^ヲを入^テ履^ク意^ハし
 履^カ裳^ト云事ありむと已^ニ傳^ハ十二^百三^十四^丁小^云るを合
 せ考^フ可^キ事あり然^レハ此^一條^ハ丈夫^ノ相^ヲ擬^ハ
 の取^廻りの敏^ク捷^クる^ハ給^ヘり^ハ為^シ御^裳を^装げ^サせ給^ヘ
 る^ガ其^即御^袴と云物^ヲ始^テ成^ルる^ハありむと^テ所^思

日本書紀傳十五卷

紙負四拾五枚

田川元毓

十卷二

田松平校合 大島操藏

